(4) 分析を踏まえた指導の改善

意識調査の結果から、一人一人の児童生徒に確かな学力の定着を図るために、以下の内容を大切にしたい指導が望まれる。

① 学ぶことの意義や目的意識を基盤にした「学ぶ意欲」を高めるための工夫改善

設問1「勉強は好きですか」、設問2「勉強は大切だと思いますか」、設問3「努力して勉強しなければいけないと思いますか」、設問4「自分から進んで勉強しようとする気持ち（意欲）がありますか」において「そう思う」「どちらかというと思う」の割合が増加している。注目すべきは、これらの質問において、「そう思わない」の割合が減少していることである。これらのことから、児童生徒は、全体的に勉強に対して前向きな受け止め方をしており、学ぶ意欲も高まってきていると考えられる。

一方、設問5で、児童生徒の勉強に対する意義や目的意識を見ると、「希望する職業につくなど将来の夢をかなえるため」を選んだ児童は7割を上回り、生徒は8割を上回る。「受験に合格するため」を学ぶ意義としている割合は、中学生になると急激に高くなり、中2では7割を上回る。全体として、自己の夢や進路の実現に向けて勉強しようとする意識をもっていると考えられる。しかし、「将来、世の中の役に立つため」を選んだ児童生徒は、どの学年でも減少しており、社会の形成者としての自覚を深めるような指導の充実が必要である。

今後は、児童生徒の発達段階に応じて、多様な観点から、学ぶことの意義や目的について考えさせるような体験的活動などを意図的・計画的に位置付けていくことが必要である。特に、学ぶことの意義や目的を社会的な存在としての責任を果たすためという視点から、実践的に理解を図っていくことができるよう工夫することが重要である。また、各教科等の学習においては、児童生徒の学ぶ意欲を高めていくために、体験的な学習や仲間同士の学び合いを大切にするとともに、実生活と関連付けた学習内容等の工夫をすることが必要である。

② 自ら問題を解決していく「主体的な学習」を生み出すための工夫改善

設問1「なぜ勉強が好き、なぜ勉強が好きではないか」に対する児童生徒の記述をみると、その理由が、「勉強がわかる・できる」「教科の好き・嫌い」に影響されていることがわかる。「わかる・できる」という視点での設問6「学校の授業がどの程度わかりますか」において、「よくわかる」「だいたいわかる」を含めると、授業がわかるととらえている児童生徒が増加している。具体的には、「よくわかる」「だいたいわかる」ととらえている児童の割合は7割以上、生徒は約6割であり、一昨年度に比べて、どの学年においても1割程度増加している。これは、各学校における「よくわかる授業」の具現に努めた成果であると考えられる。

今後も、各教科において一人一人に基礎的・基本的な内容が確実に身に付くよう、児童生徒が「わかる」という実感をもって理解することができる工夫のある授業づくり、個に応じたきめ細かな指導の一層の継続が必要である。そして、わからない、できないときにも、努力して勉強に立ち向かう学習意欲を高めていくことが望まれる。

一方、「授業がわかる」を選んだ割合が、小学校から中学校へ進学すると、大きく減少する傾向は昨年度に引き続き課題である。今後も、特に中1においては、学習の仕方、学習の内容、進路選択や学校生活への適応、人間関係の在り方等について、丁寧な指導を進めたり、学校全体の協力体制による指導を充実させることが必要である。また、小学校とも連携を図った指導に努めていくことも必要である。

設問7「授業の中でわからないことがあったらどうすることが多いか」については、児童生徒の6割以上が「友だちにたずねる」を選んでいる。仲間とともに学び合うこと、わからないことを互いに聞き合うことを大切にして指導してきた成果であると考えられる。今後も、児童生徒が相互に信頼し支えあって学び生活できる好ましい人間関係が深まるよう、より一層の指導を充実させることが必要である。

一方、昨年度に比べて、「そのままにしておく」「自分で調べる」と答えた児童生徒は減少している。今後は、疑問に思ったことを自ら調べ、考えるよう問題解決学習を充実させ、調べ方や学び方を身に付けさせるとともに、児童生徒が気楽に「先生にたずねる」ことができるような教師との人間関係づくりや環境づくりを工夫することが必要である。具体的には、教師は、児童生徒との好ましい人間関係を築くことができるよう、児童生徒の思いを共感的に受け止め、わずかな伸びや成長をとらえて認め励ますとともに、具体的でわかりやすい助言に努めることが大切である。

③ 計画的に学んでいく「学習習慣」を身に付けるための工夫改善

設問8「家庭学習の習慣化」については、1週間のうち、3回以上学習塾や家庭教師に教わっている児童は1割程度、生徒は2割を上回っている。また、「教わっていない」と答えた児童生徒の割合は、学年が進むにつれて減少し、中2では、およそ3人に2人が2日に1回は学習塾や家庭教師に教わっていることになる。こうした状況を踏まえ、学校においては、よりわかる授業の具現に努め、授業において確かな学力が身に付くよう指導することが必要である。

家庭学習の時間をみると、「30分以下」「まったくしていない」と答えた児童生徒は、1割～2割程度であり、昨年度に比べすべての学年において減少しているが、家庭での学習時間が30分未満の児童生徒の割合は、小5で13%、中2で25%と学年が進むにつれて増えている。

設問10「計画を立てて家庭学習をしている」においては、「している」「どちらかというとしている」を含むと、児童の5割強は計画を立てて学習をしているが、生徒では2～3割程度である。計画的な学習ができている割合は、中学生になると低くなっている現状を踏まえ、中学校においては、生徒たちが家庭で計画的に学習を行えるよう、学校全体として、適切な課題を課すなど、家庭学習の在り方を工夫していくとともに、生徒一人一人の状況に応じてきめ細かな指導を充実させていく必要がある。

今後は、家庭学習において「何を、どのように」進めていけばよいのかを丁寧に指導し、家庭学習の習慣化を図るよう、発達段階に応じた計画的・継続的な課題の設定、児童生徒自身が学習効果を感じ、満足感が得られるような学習内容の工夫、計画的・継続的に努力したことが認められる場の設定などを意図的に行う必要がある。その際、家庭での学習の在り方について、学校体制で考え、児童生徒や保護者の声も生かしながら取り組むことが必要である。

設問 9 をみると、1 週間のうち 3 回以上スポーツや音楽を習っている児童生徒の割合は、児童で 7 割を上回り、生徒で 6 割程度である。塾や家庭教師などの先生に習っている日もあわせて、小学生、中学生ともに、1 週間のうちに多くの日数や時間を費やしており、多忙な生活を送っていることがうかがえる。

今後は、児童生徒や保護者の忙しい生活においても、家族での話し合いや活動を通して、少しでもふれあう時間をもったり、自分の趣味の時間をもったりすることなど、家庭生活の在り方について考えさせていくことも必要である。

設問 11 の読書については、「全くまたは、ほとんどしていない」児童は 3 割を上回り、生徒は 4 割程度であり、昨年度に引き続き課題が見られる。

今後は、各学校が取り組んでいる朝読書や帯時間など全校一斉の読書活動の質の向上を図り、例えば、発達段階や学年段階に応じた良書に親しませるなど計画的・意図的な指導を工夫し、読書に対する意欲を高めることが必要である。また、教科や総合的な学習の時間などにおける学校図書館の活用の充実に努めるとともに、より質の高い読書ができるよう、家庭や地域との連携を図った啓発活動を行うなど読書環境の整備・充実が必要である。

④ 規律ある生活ができる「生活習慣」を身に付けるための工夫改善

設問 12、設問 13 の「早寝早起き」については、午前 7 時より前に起きている児童生徒（午前 6 時より前に起きている児童生徒も含む）は、8 割を上回っている。一方、午前 8 時より後に起きる児童生徒は、どの学年においても、全体の 2 % 程度存在する。就寝時刻は、学年が進むにつれて遅くなっており、中 2 になると、4 人に 1 人が午前 0 時以降に就寝している。

設問 15 の「朝ごはん」については、「毎朝かならず食べる」「だいたい毎朝食べる」児童生徒の割合は、どの学年においても 9 割を上回っている。特に、「毎朝かならず食べる」児童生徒の割合は、8 割程度である。一方、「食べないときが多い」「まったく、または、ほとんど食べない」児童生徒の割合は全体の 4～6 % 程度であり、学年が進むにつれて、その割合は増加している。

登校する前に、朝ごはんをきちんと食べること、そのために、決まった時間に起床し就寝することなどは、児童生徒の生活リズムを向上させるために大変重要である。

今後は、心身の発達に必要な睡眠時間を確保するためにも、「早寝早起き、朝ごはん」について考えさせるような指導が必要である。特に、午前 8 時以降に起床するなど基本的な生活習慣に乱れがみられる児童生徒については、保護者との連携を図り、個に応じた指導を行う必要がある。また、地域や家庭との連携を図り、朝の時間帯が、どの児童生徒にとっても楽しく充実したものとなるよう、地域や家庭での「朝の読書」や「朝の運動」など、具体的な活動を実践できるようにすることなどの方法も考えられる。

朝食の必要性については、家庭との連携を図り、家庭での食生活について指導し、「食べない」児童生徒をなくすように努める必要がある。あわせて、朝食をとっている児童生徒に対しても、栄養のバランスのとれた朝食の内容という点に着目し、望ましい食生活についても考えさせるようにする。

設問 14 の「平日の家庭での過ごし方」について、児童生徒が、平日に家に帰って

から行うことで、もっとも多いのがテレビやマンガを見たり、ゲームをしたりすることであり、どの学年も3割程度である。この割合は学年が進むにつれて増加している。「1日に3時間以上」テレビを見たり、ゲームなどを使って遊んでいる児童生徒は、3割程度である。2時間以上（3時間以上の児童生徒も含む）になると、小6、中学校において5割程度になる。児童生徒の平日の家庭での過ごし方は、塾や家庭教師、スポーツや音楽などの習い事とテレビやマンガ、ゲームなどが、その大部分を占めていると考えられる。テレビやマンガ、ゲームなどで一人で過ごすだけでなく、友だちと遊ぶ中で、人間関係を密接なものにすることは、この時期の児童生徒にとって大切なことである。

今後は、1日の生活の中で、テレビを見たり、ゲームなどで遊んだりするためにどの程度の時間が望ましいのかを自分で考えさせたり、毎日や1週間の計画的な過ごし方を考えさせたりして、自分で自分の生活を律していく力を高めていく指導が必要である。また、ネット社会の犯罪が問題になっている現代において、コンピュータや、特にインターネットの利用など、望ましい活用の仕方を指導していく必要がある。さらに、学年の発達段階や地域の状況を踏まえ、屋外で遊ぶことやその在り方について考えさせたり、地域の行事などに参加するよう助言したり、読書等にあてる時間を増やしたりするなど、家庭において、一層充実した生活がおくれるよう働きかける必要がある。

設問16 「家でのお手伝い」については、「毎日かならずしている」「だいたい毎日している」児童生徒の割合は、児童では4割、生徒では3割を上回っている。一方、「まったく、または、ほとんどしていない」児童生徒の割合は、児童では1割程度、生徒では1割を上回っている。夕食の準備を手伝う、洗い物をする、家のそうじをするなど、家庭での役割や分担をもち、家族と協力しながら規律ある生活を築いていくようにすることは大切なことである。また、進んでお手伝いに取り組むことは、自己の有用感、存在感を感じたり、働く喜びを味わったりすることにつながるものである。「お手伝いをする子どもは道徳観・正義感が身に付いている傾向が見られる」という調査結果（H10 子どもの体験活動等に関するアンケート調査結果）も示されており、家庭においても、お手伝いなどによって責任を果たすことの大切さを考えさせ、お手伝いを通じて子どもとのコミュニケーションを深めることができるよう働きかけていくことが必要である。

設問17 「自分のことは自分で気をつけてできる」については、「できている」と答えた児童生徒の割合は、児童では3割程度、生徒では4割程度である。「だいたいできている」を含めると、児童生徒の8割程度が自分のことは自分でできているととらえ、学年が進むにつれて、これらの割合が増加している。自主的な姿勢や主体的に取り組もうとする意欲は、「自分もできる」「できるようになってきた」という自信によって、より一層高まるものである。

今後は、「できていること」を見つけ、認め励ますとともに、「よりできるようにしていこう」「できることをさらに増やしていこう」といった意欲がもてるよう学校や家庭において指導していくことが大切である。また、「ほとんどできていない」児童生徒についても、「少しでもできるようになったこと」を認め、自らの生活を律する意欲をもたせていくことが必要である。

⑤ 自ら生活を律していく力を育てる「家庭環境」づくりの工夫改善

設問18「基本的な生活習慣に対する保護者の意識」については、6割程度の児童、5割程度の生徒が、自分のことは自分ですよう声をかけられたり、注意されたりしている。「よくある」「ときどきある」を含めると、児童の6割程度、生徒の5割程度が、家の人から声をかけられたり、注意されたりしているが、学年が進むにつれて、これらの割合は減少している。これは、成長するにつれて、自分でできるようになったり、保護者が基本的な生活習慣については声をかける必要がないと判断しているからであると考えられる。今後も、家庭と連携を図り、このような生活習慣が確実に身に付くよう小学校の低学年から指導するとともに、「自分のことは自分でできるようになった」成長を認め、励まして、自主的に取り組んでいくことができるようにする必要がある。

設問19「社会生活を営む上でのマナーなどへの保護者の意識」については、5割以上の児童生徒が、「あいさつやお礼」「言葉づかいや服装」「約束を守ること」について家の人から声をかけられている。どの学年においても「よくある」「ときどきある」をあわせると、5割以上の児童生徒が家の人から言われているが、中学生になると、これらの割合は減少している。このような社会生活を営む上でのマナーやモラルは、小学生のうちから繰り返し声をかけたり、日常的に気を付けるよう声をかけたりして、家庭において身に付けさせていくことが大切である。そのために、児童生徒にとって最も身近な大人である保護者と「望ましい姿」について日頃から話し合い、考えていくよう働きかけていくことが必要である。

設問20「家庭における家族とのコミュニケーション」については、「家の人とよく話をしている」と答えた児童は、小5では4割を上回るが、小6では4割を下回り、中1、中2と学年が進むにつれて、その割合が減少している。設問は、進路や友だちのことだけでなく、趣味のことなど幅広いことがらについて「話をするか」を聞いたものであったが、「少し話をする」を含めた割合は、小学校では8割程度、中学校では7割を上回る。「ほとんど話をしない」と答えた割合は、学年が進むにつれて増加し、中学生では2割程度である。また、どの学年にも「まったく話をしない」児童生徒が1割未満いるなど、家庭におけるコミュニケーションが十分に図られていない児童生徒がいることがうかがえる。

学校において、児童生徒とのコミュニケーションを深め、小さなサインも見逃さず、その子の気持ちや悩みなどを共感的に理解しながら指導を進めていくことは大切なことであるが、家庭においても、学校や友だちのことだけでなく、趣味や進路など、様々な面から話し合い、子どもの考えや状況を保護者が把握し、理解を深めていくよう働きかけることが必要である。こうした話し合いを通して、現在の課題となっているいじめの早期の発見に努めたり、これからの進路など、児童生徒が抱える悩みや不安などについて、お互いの思いや考えなどを伝え合い、よりよい生き方について理解を深めていくことが大切である。